

統一地方選挙の性格

沖 田 哲 也

今年は統一地方選挙の年。4月に首長、議会の選挙がひしめいている。都市部も非都市部（郡部）も昨年暮がひとつの勝負どころであったといった人もいる。地方議会選挙のばあい、大都市、中小都市、大都市近郊の周辺都市、あるいは農村漁村を含む市町村、それぞれ自治体の規模によって選挙形態が異っている。少々、ひゆ的にいうと大都市では、いわゆる日常選挙・どぶ板型。中小都市では、候補者・有権者の「あ・うん」型。大都市周辺では、新来住民によって組織化はされていても選挙では案外その時ぼったりの不安定型。群部では既存秩序型——当落は事前にきまっている事が圧倒的に多い。

話がそれるが大都市、とくに東京23区の都心部は、夜間人口が少くしかも高齢化している。もうひとつの特徴は、ゆうれい人口が多いことである。店舗、事務所に住民として届出をしておき本人は、家族の居住する他区に住む。印かん登録、住民票を昼間勤務先でただちに取得するためである。したがってその基本選挙人名簿に記載されているが、休日の投票日にわざわざ投票場まで足を運ぶ人は少い。候補者はこの名簿から割り出した、わが“お地元のみなさま”の人数をあてにはできない。どぶ板選挙とは、地元のお世話をするとともに重要なことは、候補者の名前と面識を保持してもらうためであることは言うまでもない。そこで区議候補者は、有権者名簿をつくり、各有権者の名前の上に○△×の記号を付す。○は自分に投票確実、△は不安定、押しようによっては○にもなる、×は全く手答えなし、日常選挙とは、△を○になおす運動でもあり、○にも、他人にそれないように確保、腐心する。

ところで、この運動の古今東西を問わぬ例をあげておこう。19世紀の後半、ニューヨークの市議、地域ボスながら名前からして物凄いジョージ・ワシントン・ブランキットの、ある一日の生活を紹介しよう（アリスティア・クック著、

アメリカ(下), 140頁引用)。

午前2時 酒場のバーテンから電話。店主が逮捕されたので、貰い下げをこん願。保釈金を積んで引き取る。

午前6時 火事の現場へ。罹災者をホテルに入れ衣食を差し入れ。

午前8時半 軽犯罪裁判所へ。よっぱらい2人を貰い下げ。罰金、当方もち。

午前9時 地区裁判所にて、立ち退きを命ぜられている婦人弁護。

午後3時 イタリア人の葬式、つづいてヘブライ人の葬式。カトリック式でもユダヤ教式でも、最前列につく。

午後7時 地区本部で、区内全有権者のリストの中から生活困窮者を摘出。

午後8時 教会のバザーへ。子供達にアイスクリームを買い与える。

午後9時 クラブハウスにゆき、教会へ献金、野球の切符を買わされ、行商人の警察への苦情をきく。

午後10時半 ヘブライ人の結婚披露宴に。ダンスパーティーに出席。

午後12時 就寝。

時代と国が異るとはいえ、地方議員は、まさに大同小異の活動をしている。ことにアメリカでは当時、小さい選挙区で1議席を競っているのでひとたび当選すれば、次回選挙のための勢力保持には可成りの緻密さと資金を要した。多人種構成の社会であるから次々に新移民が大都市に流入し、この市民権取得後の有権者に対しては流入直後から生活ケヤーを必要とした。当時は社会福祉が不徹底であったので、個人団体の慈善に依存せざるを得ない。そこに地域選出議員の活躍の場が提供される。議員の活躍には、相応の資金が不可欠であるから、これが利権に結び付いた。

利権、不正、腐敗でひねり出した金銭が(集票のための)議員活動に用いられるから、被保護者にとっては、議員が義賊にうつってくるダーティーな行為が美談に転化した。

この局面を迎えたアメリカ地方自治は、自治史上画期的な選挙制度の改革期に入る。とはいえ地方制度は、自治体毎に区々であるから日本のように選挙法改正という、国単位の改革ではない。自治体がめいめい条例の改正をしなけれ

ばならない。つまり改革運動を全米に席卷させねばならなかった。改革の方向は、政党による立候補制を排し——ノンパルチザン——，自治体全体を一区制にする——アト・ラージ・エレクション——方法で，大都市は相い次いでこの改革を容れたが中都市では従来通りの制度を踏襲した。

その結果は，改革した自治体では選挙の関心が低下し，腐敗は議員→利権→コミュニティのレベルから大型，高度化し，議員団⇄企業という相互まるがかえに伸び及んだ。

他方，従来の制度を採っている都市では，議員と有権者のさきへのべた型のゆ着は残存したものの，改革都市に比して選挙時の白熱化，関心は高まった。議員のダーティーな活躍は，筆者の実態研究の限りでは，社会福祉の増加と貧困移民の減少さらには，ニクソンのスキャンダラスな政治生活に対する全米の批判的風潮が，大きな転機となって，相手にされなくなりつつある。

先回の選挙には，いくつかの特徴があらわれた。まず若返り，行政的手腕が投票の価値決定の基準になり始めたことである。

日本の地方選挙も，中央政界の倫理が問われその投影をうけて，投票価値の基準に大きな変化があらわれ始めるのは，何時になることであろうか。利益関係の指標とすべきことは，有権者個人と議員ではなく，また狭いコミュニティと議員ではなく，自治体住民と議会という対応が何時，住民の側で自覚されるものであろうか。